

『公事録』（恒例・臨時）の概要と特徴

所 功

はじめに

日本の宮廷では、古来の伝統が本質的に継承されている。とはいえ、明治維新により西欧風の文明開化を国是として、著しく変化したことも少なくない。その代表的な一例が、宮廷で行われる儀式行事^{（くじ）}「公事」の在り方である。

そこで、明治十年代に入るところから、従来の在り方を正確な記録や絵図として後世に伝えようとする動きがみられる。そのうち、最も本格的に作られたのが、『公事録』（現在宮内庁所蔵）にほかならない。

本稿では、この『公事録』の成立と概要を紹介する。そのために、同じ明治中期に作成された『嘉永年中行事』および『旧儀式図画帖』との項目を対比することにより、『公事録』の特徴を少しでも明らかにしたい。

なお、『公事録』の「恒例」付図は、すでに出版されている^{（1）}。また「恒例」だけでなく「臨時」の付図も含めて、最近Web公開されるに至った。ただ、両方とも絵図だけで、詳しい説明の本文は公開されていない^{（2）}。

一 『公事録』の成立経緯

『公事録』については、これを所蔵する宮内庁書陵部で図書課主任研究官を務めていた嗣永芳照氏が、編著『宮中行事』注1参照の「総説」で簡明な解説を記されている。それを参照しながら、若干の補足を加えて、成立経緯を略述すれば、次の通りである。

この資料は、漢文体の本文と彩色の絵図から成る。その「恒例」本文の目録末尾、および後で加えられた付図目録に所載の識語により、全体が成立するまでに五段階あったことがわかる。

(イ) 明治十年(一八七七)冬、右大臣兼華族会館長の岩倉具視(数え53歳)が、旧公家の中山忠能(69歳)以下八名に、公事の記録と付図の作成を命じた。

(ロ) 同十一年十二月、宮内省が「維新以前の諸儀式取調」を行うため、中山忠能ら二十一名を任命して、関係文献の収集と編纂に取り組み始めた。

(ハ) 同二十年(一八八七)十一月、『公事録』のうち、a 恒例行事の本文四十五冊と、b 同付図二帖(上下)、c 臨時行事の本文二十二冊、d 同付図一帖、e 御即位関係図四卷(「御礼服図」一卷・「御調度図」三卷)と、指図一鋪(「殿庭鋪設建図」)を完成し、同十二月十四日、明治天皇に(36歳)上呈した。

(ニ) 同二十年十二月、宮内省が引き続き、光格・仁孝・孝明三代天皇の「御凶事」(葬礼)編纂を、旧公家の広幡忠礼以下九名に下命した。

(ホ) 同二十四年十二月、f 三代(光格・仁孝・孝明三天皇)御凶事の本文二十八冊、g 同付図一帖などを『公事録』の「付録」として完成した。

このうち、(イ)の八名は、中山忠能(旧准大臣、明治天皇外祖父)、久我建通(旧内大臣)・柳原光愛(旧藏人頭)、野宮定功(旧武家伝奏・中納言)・嵯峨実愛(旧権大納言)・柊本実架(旧侍従・前宮内省御用掛)・北小路俊昌(旧中務大丞)である。

ついで、(ロ)以後もない異同として、明治十二年には、松尾相保(旧藏人、前宮内権少丞)と中川定續(旧藏人・前内膳権正)および北小路随光(旧左京権大夫・前神宮大官司)が加わり、また柳原光愛に代って竹屋光昭(旧左衛門佐・前雅楽部長)、松尾相保に代って羽倉信可(旧非藏人)が入っている。

翌十三年三月には、樋口守保(狩野探淵門下)が「維新以前諸儀式取調絵図御用」を仰せ付けられ、時期不明ながら、目録の識語によって、広幡忠礼(旧内大臣)・裏辻公愛(旧左中将)・岩倉具綱(前参互)なども加わっている。

さらに、(ハ)に続いて「付録」の命を受けに(二)の編纂を命じられたのは、前記の広幡・嵯峨・北小路・勘解由小路・岩倉・竹屋・羽倉および樋口の八名である。しかも、北小路と樋口は、恒例のb、臨時のdとe、付録のgを描いたことが、eの目録に付けられた「付図目録」により確認(gについては推定されている(注1総説一七五頁))。

二 『嘉永年中行事』との対比

この『公事録』ⅡAと内容の時代も成立の年代も異なる史資料として、『嘉永年中行事』ⅡBと『旧儀式図画帖』ⅠCがある。その成立経緯を略述して比較する。

まずBについては、著者の勢多章甫が明治二十一年(一八八八)に記した「緒言」を、少し読み易くして(丸括弧内は私註)、ほぼ全文引用しよう。

1 我が皇朝、中古(中世)以来、朝権武門に移れり。而して武門は、治世の道を失ひ、兵乱日に踵^つぎ、朝貢(朝廷への貢物)闕乏し祭政悉く廢絶す。豈に慨歎に堪ゆべけんや。

2 宮中に政あり。其の事たる、往々記録に散見せるも、未だ成書あるを聞かざるなり。後水尾帝、当時（江戸初期）の事を勅撰せられ、古に及ばざるを宸憂し給ふ。此の書を『禁裏（当時年中行事^⑤）』と称す。列聖、其の勅旨を續^つがれ、絶たるを継ぎ、廢れたるを興し給ふに依り、之を慶長・元和年間に比較せば、燦然^{さんぜん}観るべき者尠^{すく}なからず。

3 今上（明治天皇、踐祚に当り、百事一新し、万機親裁に出で、実に時勢の一変したる事なれば、今日に於て、若日の政事を追慕するに非ずと雖も、歴朝^{きさ}些々たる朝貢を以て、叡慮を慰め奉る実況を詳記せんと欲する事、茲に久し。

4 頃日^{このころ}、華北に某あり。先朝（孝明天皇朝）の年中行事を編修し、之を世に伝へん事を請へり。予素より微臣なりと雖も、常に宮内に翱翔^{こうきやう}して（飛び廻り）、聊^{いささ}か見聞せし事なきに非ず。されば予喜んで其の需^{もとめ}に応ぜり。

5 予竊^{ひそか}に考るに、先朝の在位長からざるに非ず。安政年間に至つては、内外の事多端にして、亦た沿革なきに非ず。因りて嘉永年間を以て起草し、彼の『禁裏年中行事』を基礎となし、或は古老に問ひ、或は記録^{きんろく}に攷^かへ、古今の沿革を校正し、以て一小冊を作れり。今これを『嘉永年中行事』と称す。……

右の文意は解説するまでもないから、著者について簡単に説明を加えよう。勢多章甫（一八三〇～一八九四）は、律令制の明法道を家学とする中原氏の後裔であり、安政四年（一八五七）最後の明法博士となった。明治に入り宮内省や皇典講究所に勤めながら、『古事類苑』帝王部の起草に尽力している。このような故実学者が、自ら奉仕していた「先朝（孝明天皇朝）の年中行事」を編修し、「之を世に伝へん事」を求められた。そこで、後水尾天皇勅撰の『禁裏（当時）年中行事』を手本として、古伝と記録により考証を加えたものが本書である。

このB『嘉永年中行事』は、私的な著作であるが、公的に編纂されたA『公事録』と成立年代が近い。よつて、A『公事録』の恒例・臨時の全項目を列挙すると共に、Bとの異同などを対比（注記）して表示すれば、次の通りである。

『公事録』項目一覧

(嘉永年中行事との対比)

凡例

- 一 A『公事録』の項目に数字通番号を冠した。
- 二 B『嘉永年中行事』とAの共通する項目には、右側に―線を付した。
- 三 Bに有りAに無い項目は、(―)を冠して書き加えた。
- 四 Aのうち、絵図にある項目名には、○印で囲み太字とした。

恒例

正月(第一―第十二)

第一 正月

1(朔日)四方拝

①出御之図

第二 正月

2一日 内侍所神饌之儀

(1)朝の物

3同日 朝餉御膳之儀

4同日 御菌固之儀

5同日 撰家中参賀之儀

(2)御吉書始

(3)うけとり

(4)御祝

6同日 両役 御対面之儀

7同日 近習小番御免外様

衆御対面之儀

8同日 内々衆賜_二天盃_一

之儀

9同日 外様番衆所被_レ出

御銚子之儀

第三 正月

10元日節会

②公卿着_二外弁座_一之図

③公卿参_二列標下_一之図

第四 正月

11二日 大床子御膳

(5)朝の御ものうけとり

(6)式日の御礼

(7)御祝

12同日 内侍所木造始之儀

13同日 御庫開之儀

第五 正月

14二日 藏人頭補略献上之儀

儀

第六 正月

15二日 所司代参賀之儀

16三日 親王方華族大臣参賀并差延輩御礼之儀

(↓親王家御参賀)

清華大臣御礼/差延御

礼

(8)三日朝の物うけとり

(9)御末広

(10)御祝

17四日 南殿洒掃之儀

18同日 外様御礼之儀

19同日 披露始之儀(↓五日)

日

20同日 両役所司代役宅行向之儀

(11) 四日朝之物

(12) 朝の御膳

21五日 千秋万歳之儀

④参_二内殿前庭_一千秋万

歳之図

⑤参内前庭猿楽之図

22 同日 両役近習等賜_二御

年玉_一之儀

(13) 五日銚始

(14) 六日年越

(15) 七日朝の物御祝

(16) 式日御礼

(17) 七草

卷七 正月

23 北陣

⑥檢非違使糾彈之図

24 白馬節会

⑦大将之奏文之図

⑧白馬渡馳送之図

⑨舞妓之図

卷八 正月

25 八日 入道親王参賀之儀

26 同日 後七日御修法

(18) 太元帥法

(19) 内々御門跡御参賀

第九 正月

27 九日 黒御所御礼之儀

28 同日 外様門跡御礼之儀

29 同日 外様入道御礼之儀

30 十日 本願寺

十八日 東本願寺御礼参

内之儀

31 十日 諸礼之儀

32 准后御局出御始之儀

33 神宮奏事始之儀

(↓十一日)

34 賀茂奏事始之儀

(↓十二日)

35 毎日 御拝之儀

(↓御拝始)

36 別殿 行幸之儀

(20) 御修法中日

(21) 十四日御修法結日

37 十五日 御吉書三毬打之儀

儀

(22) 十五日 朝の物御

祝

(23) 式日御礼

(24) 十六日 朝の物

第十 正月

38 踏歌節会

⑩立楽之図

⑪宣命拝之図

第十一 正月

39 十七日 三毬打之図

⑫小御所東庭三毬打之図

40 十九日

⑬鶴包丁并舞御覧之儀

⑭南庭舞御覧振鉦之図

(25) 二十日 小豆餅

41 二十日/廿一日

法中御礼之儀

42 廿四日 和歌御会始之儀

第十二 正月

43 毎月晦日 清凉殿御掃除

之儀

44 日供御膳男方供進之儀

45 知恩院参内之儀

46 大樹奉之鶴進献之儀

47 和歌当座御会始之儀

48 初庚申賜_レ鬺之儀

(26) 廿六日 内々御祥忌

(27) 廿八日 御祝

(28) 晦日 護持

二月(卷十三)卷十八

(29) 朔日 御祝

(30) 式日 御礼

49 節朔撰家・官方・華族・大臣・両役参賀 御対面

之儀

50 節朔御盃之儀

51 年頭御祝儀、関東使所司

代同伴参 内之儀

52 年頭御祝儀、勅使武家伝

奏関東下向之儀

53 年頭御祝儀、武家伝奏御

使賜扇輪王寺宮之儀

(31) 大樹年頭使并年中献

物

54 御鏡洗(磨)之儀

(32) 六日 御祥忌

卷十四・十五 二月

55 春日祭

(15) 使飾馬御覧之図

卷十六 二月

56 大原野祭

57 学習院和漢御会之儀

58 丁祭之儀(釈奠)

59 十五日 涅槃会之儀

60 (廿二日)

水無瀬宮和歌御法楽

61 (廿五日)

聖廟和歌御法楽

62 月次和歌御会之儀

63 御学問所和歌当座御会之

儀

64 藏人頭補略并現任以下次

第類献上之儀

(33) 関東御使

三月(卷十九、卷廿二)

第十九 三月

(34) 朔日 雛人形

(35) 三日 御節供

(36) 式日御礼

65 三日 闘鶏之儀

(16) 参台殿前庭闘鶏之図

66 神武天皇山陵奉幣使

67 御楽始之儀

(17) 小御所御楽始之図

第廿・廿一 三月

68 石清水臨時祭

(18) 御禊之図

(19) 庭座之図

第廿二 三月

69 月次御楽(始)之儀

70 能 御覧之儀

71 仁和寺観音院結縁灌頂御

祈奉行参向之儀

四月(卷廿三、卷廿六)

第廿三 四月

72 (朔日)更衣之儀

(20) 清凉殿十月更衣之図

73 (三月) 東照宮奉幣使

74 稻荷祭

75 平野祭

第廿四 四月

76 松尾祭

77 梅宮祭

78 山門元三会 勅使参向之

儀

79 吉田祭

第廿五 四月

80 賀茂祭(、葵桂)

(21) 東庭求子列舞之図

第廿六 四月

81 小番勤定之儀

82 口向侍分并御医座次帳附

両役之儀

五月(卷廿七)

83 藏人頭諸家伝書継献上之

儀

84 菖蒲御枕献上之儀

85 (四日) 葺菖蒲殿門并菖蒲

御殿設之儀

86 賜薰衣香(袋)之儀

(37) 五日

(38) 式日御礼

(39) 菖蒲御湯

(40) ひの木胄

(41) 薬玉

(42) 八日/十五日 今宮

祭

87 新日吉祭

88 御茶壺宇治出行之儀

六月 卷廿八・卷廿九

卷廿八 六月

(43) 朔日御祝

(44) 御めぐり

89 御誕辰御祝之儀 (御降誕

日)

90 大樹(将重)新茶進献之儀

91 祇園臨時祭(七日、十四日

祇園舍)

②使読 宣命之図

卷廿九 六月

92 (十九日) 嘉祥御盃之儀

93 暑中賜「晒布」之儀

94 大樹暑中伺進献之儀

(45) 廿二日 水無瀬宮御

法楽

(46) 廿五日 聖廟御法楽

95 (晦日) 清祓

②3内侍所前庭清祓之図

96 茅輪并名越御盃之儀

(47) 御湯

(48) 御祝

七月(卷卅)

(49) 七日 御節供

(50) 七日 御手向

(51) 式日御礼

(52) 茅輪

97 七夕梶葉 宸翰之儀

②4七夕梶葉 宸翰之図

98 同日 和歌御会之儀

99 同日 花使之儀

100 賜「中元御祝儀」之儀

101 十一日(御)目出度御盃之

儀(事)

102 (十五日) 中元(御)燈籠献

上之儀

②5中元御燈籠献上之図

103 十四日 双親輩勤番之儀

(53) 有「二親」人御礼

104 中元御盃之儀

105 関白并両役御提灯拝見之

儀

(54) 十八日 御霊祭

八月(卷卅一・卷卅二)

卷卅一 八月

(55) 朔日 田の実

106 一日 諸臣太刀献上之儀

107 同日 大樹太刀馬進献之

儀

(56) 御饒磨

108 北野臨時祭

②6舞人走馬之図

卷卅二 八月

109 (十五日) 放生会

110 十五夜月御覧之儀

(57) 十八日 御霊会

(58) 丁祭

111 山門勸学会 勅使参向之

儀

112 大樹初鮭進献之儀

九月 卷卅三

113 藏人頭公卿補任書繼献上之儀

114 八日 菊綿之儀

(59) 九日 御節供

(60) 式日御礼

115 重陽和歌御会之儀

116 (十一日) 伊勢 例幣

②7 神祇官代之図

(61) 十三日 名月

十月 卷卅四 卷卅五

卷卅四 十月

117 亥日 御玄猪之儀

(62) 朔日 更衣

(63) 御祝

(64) 能勢餅

(65) 衛士餅

(66) 十三日 御祥忌

118 山門大会 勅使参向之儀

119 新茶御壺口切之儀

卷卅五 十月

120 維摩会 勅使参向之儀

121 十五日 御日待之儀

十一月 卷卅六 卷四十二

(67) 朔日 郁子

(68) 曆

(69) 春日祭

122 新嘗祭

②8 南殿寄「御輿」之図

②9 神饌行立之図

③0 遷幸之図

卷四十一 十一月

123 豐明節会

③1 大歌舞妓之図

卷四十一 十一月

124 賀茂臨時祭

③2 社頭一舞之図

③3 還立之図

125 大樹進献茶壺口切之儀

126 子祭彈箏之儀

十二月 卷四十二 卷四十三

卷四十二 十二月

(70) 八日 温糟粥

(71) 小御所御字問所御取置

置

127 内侍所御手始并諸殿御煤

払之儀

128 護持僧之儀

卷四十三 十二月

129 内侍所臨時祭御神楽

③4 内侍所臨時御神楽之図

卷四十四 十二月

130 大樹藥園藥種進献之儀

131 正月式献上已下之儀

132 小番結改之儀

133 御髪上之儀

(72) 御寄会

(73) 節分

(74) 御方違

(75) 立春日

134 大福茶分配之儀

135 御徳日幸徳井注進之儀

136 差筵已下正月御構之儀

137 諸奉行月割付「議奏」之儀

儀

卷四十五 十二月

138 諸奉行并非常参勤帳献上之儀

儀

139 女房次第付「長橋局」之儀

儀

140 非藏人次第付「議奏」之儀

儀

141 御纓揉之儀

142 日月蝕御殿覆之儀

143 歳末御札之儀

(76) 晦日 御湯

(77) 御祝并御年の実

(78) 清祓

臨時

144 第一 a 小朝拝

(35) 東庭参列之儀

145 第二 b 御讓位(上中下)

b 御讓位(上中下)

(36) 劍璽渡御之図

146 第五 c 御即位(上下)

c 御即位(上下)

(37) 読宣命之図

以上の項目対比を整理すると、B『嘉永年中行事』には一三四項目あり、A『公事録』の「恒例」として一四三項目および代始諸儀を含む「臨時」として七項目がある。ただ、BにあってAの「恒例」にない(一)で補った細目(一行目に複数項目ある場合)が七八あり、AとBの両方に共通する項目(――傍線を付したものは五一に留まる。

(38) 即位後開口風流能之図

147 第七 d 大嘗会(一～五)

d 大嘗会(一～五)

(39) 国郡卜定之図

(40) 荒見川祓之図

(41) 御禊之図

(42) 渡御悠紀殿之図

(43) 主基国風俗舞之図

(44) 辰日奏「寿詞」之図

(45) 巳日田舞之図

(46) 清暑堂御遊之図

(47) 豊明節会久米舞之図

148 第十二 伊勢公卿 勅使

第十三 内侍所仮殿渡御

内侍所本殿 渡御

149 第十四 宇佐使

(48) 御禊之図

第十五 女御入内

(49) 仰輦車宣旨之図

第十六 立后

(50) 冊命使啓事由之図

(51) 飛香舎宴座之図

150 第十七 中宮御産

(52) 読書鳴絃参列之図

准后御産／女房御産

151 第十八

儲君御治定親王宣下

儲君親王御読書始之儀

(53) 儲君親王御読書始之図

152 第十九 立太子

(54) 諸卿啓賀之図

(55) 本宮大殿祭之図

東宮御書始

153 第二十 東宮御元服

(56) 加冠理髮拝舞之図

(57) 宴会献御贄之図

第廿一 天皇御元服

皇御書始

御笙始之儀

154 第廿二 改元定

小御所東庭舞楽御覧東使

拝見之儀

(58) 小御所舞楽東使拝見之図

御学問所南庭蹴鞠御覧

之儀

御有卦入御祝之儀

つまり、同じ幕末の年中行事でも、公撰のAと私撰のBは、採目の視点が異なっており、Aが編纂過程でBなどの類書を参照したにせよ、直接的な関係は認められない。そしてBは、文字で項目を説明するにすぎないが、Aには新しく精緻な大和絵画風の絵図が「恒例」部の項目・細目に三四面、および「臨時」部に二四面（合計五八面）加えられており、しかも全項目・細目に関する詳細な説明の本文（漢文体）まで作られている、

従来から、宮廷の儀式行事を文字で解説したり、その一部（儀場・調度など）を絵図にしたものは、少なからずあった。しかしながら、このA『公事録』は、その全体にわたる説明のうち六〇面近い絵画を具備しており、きわめて史料的な価値の高い編纂物と称してよいと思われる。

四 『旧儀式図画帖』との比較

一方、C『旧儀式図画帖』については、東京国立博物館（特別展室長）の猪熊兼樹氏編著『旧儀式図帖にみる宮廷の年中行事』に簡潔な解説がみえる（注4参照）。その要旨は左の通りである（丸括弧内は、私註）。

この図画帖は絹本着色・貼込折本である。その作者は、「明治三十年（一八九七）に皇后（昭憲皇太后）の命を受け、かつて六位藏人として宮廷に勤務していた藤島助順である。彼自身、光格・仁孝。孝明の三天皇の宮廷において行われた恒例・臨時の儀式行事を見聞しており、その記録として作製したもの」とみられる。その付図（図画）については、「絵画表現が粗かつたり考証に問題が見受けられる」けれども、「宮廷行事や宮廷空間の実態を活写する……」と猪熊氏に評されている。

これに少し付け加えると、作者の藤島助順は、慶応四年（明治元年）二八六八三月、「五箇条御誓文」の「誓約奉対書」に署名した文武官人数百名の一人であり「訂藏人藤島助順」と自署している⁽⁶⁾。また『地下家伝』によれば、助順

の曾祖父助功(一七五〇)一八三三は光格・仁孝両天皇の蔵人、祖父の助胤(一八一〇)一八五二は仁孝・孝明両天皇の蔵人を務めている。従って、この助順はおそらく曾祖父以来の奉仕記録などが手もとにあり、自身も若いころ奉仕経験をもつゆえに、先三代の儀式行事を説明し描写したものと考えられる⁽⁸⁾。

その四十八帖の構成は、左の通りである。

⑧ 光格天皇(上皇)の関係儀式(十五卷)

1 ～ 5 御讓位・御受禪 / 6 上皇尊号御報書・仙洞御所年々被_レ行御式 / 7 上皇修学院御幸始 / 8 ～ 15 上皇御凶事

(御葬儀)

⑨ 仁孝・孝明両天皇の關係儀式(十二卷)

16 仁孝天皇女部御入内・悦仁親王御降誕 / 17 統仁親王(のち孝明天皇)立太子御式 / 18 統仁親王東宮御元服御式 /

19 ～ 22 仁孝天皇御凶事 / 23 ～ 27 孝明天皇御凶事

⑩ 恒例年中行事(十五卷)

28 ～ 34 春(二月～三月) / 35 ～ 36 夏(四月～六月) / 37 ～ 38 秋(七月～九月) / 39 ～ 42 冬(十月から十二月)

⑪ 新清和院(光格天皇中宮欣子内親王)御凶事(三卷)

⑫ 新朔平門院(仁孝天皇女御鷹司_{やすこ}禊子)御凶事(三卷)

このC『旧儀式図画帖』のうち、⑩「恒例年中行事」には、春・夏・秋・冬の全十五卷(28～42)に項目(便宜(1)～番号を冠する)に五十九面の図画がある。そこで、これをA『公事録』恒例に絵図のある項目番号(前掲)を「」内に書き入れて対比する(逆に『公事録』にない項目の右傍に点線を付す)。

正月：(1)四方拝(1)、(2)撰家中御礼拝賀、(3)元日節会(10)、(4)大床子御膳(11)、(5)両役・所司代役宅行向、(6)御年玉、(7)千秋万歳・猿舞(21)、(8)白馬節会(24)、(9)後七日御修法(26)、(10)御拝始(35)、

(11) 和歌御会始〔42〕、(12) 左義長〔39③〕三稜打、(13) 踏歌節会〔38〕、(13) 鶴包丁〔40〕、(14) 舞御覧〔39②〕
 二月…(15) 節会別殿行事、(16) 春日祭〔55〕、(17) 関東使参賀〔51〕関東使所司代同伴参内之儀、(18) 御鏡洗〔54〕、
 (19) 御楽始。
 三月…(20) 闘鶏〔65〕
 四月…(21) 更衣〔72〕、(22) 賀茂祭〔80〕
 五月…(23) 菖蒲御殿〔85〕菖蒲殿門并菖蒲之儀
 六月…(24) 清祓〔95〕、(25) 茅輪〔96〕
 七月…(26) 梶葉宸翰〔97〕、(27) 七夕花使〔99〕、(28) 燈籠御覧〔102③〕、(29) 双親輩勤番〔103〕、(30) 内々御踊御覧、
 (31) 中元御盃〔104〕
 八月…(32) 八朔、(33) 月御覧〔110〕、(34) 学習院丁祭、(35) 石清水放生会〔109〕放生会
 九月…(36) 菊綿〔114〕、(37) 伊勢例幣〔116〕例幣
 十月…(38) 御玄猪〔117〕、(39) 新茶御壺口切〔119〕
 十一月(40) 新嘗祭〔122〕、(41) 豊明節会〔123〕、(42) 御火焚、(43) 賀茂臨時祭〔124〕
 十二月(44) 内侍所御神楽〔129〕内侍所臨時祭御神楽、(50) 御煤払、(53) 御髪上〔133〕、(54) 官位御沙汰、(55) 小番結改
 〔132〕、(56) 正月式獻上、(57) 御纓採〔141〕、(58) 大福茶分配、(59) 歳末御札〔143〕
 このように、多くは古来の主要な恒例行事であるが、近世の新儀も少しみられる(2)・(5)・(34)・(39)・(58)など。
 また、絵図はA『公事録』の方が極めて精密に描かれているが、C『旧儀式図画帖』では図画の余白に簡単な説明を
 書き入れており、判り易くなっている。

これは、Cの③を除く②④と⑤⑥の部分も、ほぼ同様といえよう。この部分は特に「御凶事」の詳細な絵図がA

『公事録』にある。その細目を列挙すれば左の通りである(AはCにない「孝明天皇御凶事」も描いている)。

「あ」光格天皇御凶事(十二卷)

一 崩御／触穢／御入棺／御遺奏／警固々関／廃朝／御葬送之儀

二 御中陰中両寺御法会之事

三 ①弘御所御座之図／②御葬送弘御所御出車之図／③臣下素服之図／④泉涌寺御道筋之図／⑤龕前堂之図／⑥山頭之図／⑦御香袋并御先香炉之図／⑧御車全図／⑨懸牛之図／⑩宝龕之図／⑪龕前堂尊牌並尊牌覆之図／⑫龕前堂御調度之図

四 ⑭龕前堂百味御盛物之図

五 倚廬之儀／10 御禊之儀／開関解陣之儀／12 椽宣下之儀

六 ①倚廬殿(御学問所)渡御之図／②北陣代(平唐門代)公卿以下着素服之図／③倚廬殿之図／④倚廬殿天井之図／⑤竹御帳台之図／⑥同柱之図／⑦同天井之図／⑧御几帳之図／⑨御几帳台之図／⑩御茵之図／⑪劍璽案之図／⑫劍璽覆之図／⑬御冠筥之図／⑭御廿坏之図／⑮御手巾掛之図／⑯芦簾之図／⑰御幌之図／⑱竹灯台之図／⑲賜紵御服以下之図／⑳倚廬御膳御台之図／㉑御禊御贖物筥並案之図／㉒御贖物之図／㉓倚廬殿還御之図／㉔清涼殿諒闇御装束之図／㉕同御帳台並御調度之図／㉖倚廬殿還御御膳供進次第之図／㉗諒闇御服之図／㉘倚廬臣下素服之図／㉙臣下諒闇服之図

七 13 皇太后宮(光格天皇皇后欣子内親王)御素服御心喪服着御之儀／14 欽宮(光格天皇皇女養子内親王)御素服御心喪服着御之儀／15 束宮(孝明天皇御童体)御輕服並心喪服着御之儀／16 敏宮(仁孝天皇皇女淑子内親王)御輕服並御心喪服着御之儀／17 音楽警蹕並吉書御覽陣之儀／18 旧院光明供之儀

八 19 触穢終清祓之儀／20 束宮触穢終清祓之儀／21 御塔供養之儀／22 皇太后宮院号定並御薙髮之儀

九・十 御諡号之儀

十一 ①御諡号御拝已下之図／②別貢雜給御幣物之図／23 御百箇日御法事之儀／24 御一周忌御法会之儀／25 諒闇終大祓之儀／26 諒闇終吉書御覽之儀

十二 27 御懺法講之儀／28 三回聖忌於両寺御法会之儀／29 聖忌―般舟三昧院御經供養之儀

〔い〕仁孝天皇御凶事(五卷)

十三 30 崩御／31 舁穢／32 御入棺／33 御諡号之儀／34 遺詔奏之儀／35 廢朝之儀／36 警固々閑之儀／37 御葬送之儀

十四 38 御中陰両寺御法会之儀／39 御諡号之儀

十五 40 倚廬之儀／41 御禊之儀／42 開閑解陣橡宣下陣之儀／43 新清和院・准号・敏宮等御凶服着御之儀／44 音楽警蹕并吉書御覽陣之儀／45 舁穢訖清祓之儀／46 本所素服輩除服出仕之儀

十六 47 遺詔奏以下諸下行／48 御塔供養之儀／49 御百箇日両寺御法会之儀／50 一周聖忌両寺御法会之儀／51 諒闇終之儀／52 諒闇終大祓日時定陣之儀下行

十七 53 御懺法講之儀／54 三回聖忌両寺御法会之儀／55 聖忌御經供養之儀

〔う〕孝明天皇御凶事(十四卷)

十八 56 崩御／57 舁穢／58 御入棺／59 遺詔奏之儀／60 廢朝之儀／61 警固々閑之儀／62 御葬送之儀

十九 63 御中陰中両寺御法会之儀／64 倚廬之儀／65 御禊之儀／66 開閑解陣橡宣下陣之儀／67 准号靜寛院宮等御凶服着御之儀／68 桂宮御凶服之儀

二十 69 御諡号之儀

廿一 70 音楽警蹕如元吉書御覽陣之儀／71 舁穢終清祓之儀／72 本所素服之輩除服出仕之儀／73 御百箇日両寺御法会之儀／74 山陵御造営成功宣命使參向陣之儀／75 同泉涌寺御法会之儀／76 一周聖忌両寺御法会之儀／77 諒闇終之儀

／78 御遺物并御遺金下賜之儀

〔え〕前新清和院（光格天皇中宮欣子内親王）御凶事（四卷）

廿二 79 崩御／80 触穢／81 御入棺

廿三 82 御葬送之儀

廿四 83 御中陰中両寺御法会之儀／84 開閔解陣之儀／85 光明供之儀／86 触穢訖清祓之儀

廿五 87 御中陰中御法会并諸下行／88 御塔供養之儀／89 御百箇日両寺御法会之儀／90 一周御忌両寺御法会之儀／91

三回御忌両寺御法会之儀

〔お〕前新朔平門院（仁孝天皇女御鷹司祺子）御凶事（三卷）

廿六 92 院号定之儀／93 崩御／94 触穢／95 御入棺／96 廢朝／97 遺令奏之儀／98 御葬送之儀／99 御中陰中両寺御法会之儀／100 錫紵着御之儀

廿七 101 遺令奏以下諸下行／102 御塔供養之儀／103 御百箇日両寺御法会之儀／104 一周御忌両寺御法会之儀／105 御忌般

舟三昧院御法会之儀

廿八 106 御忌御懺法講之儀

しかも、この後に「公事付録之図」として、左の十一図が描かれている。

④④ 孝明天皇御葬送御出車之図／④⑤ 同御葬送御列之図／④⑥ 同泉涌寺御車舍着御之図／④⑦ 同倚廬殿渡御之図／④⑧ 同本殿還御之図

④⑨ 光格天皇御中陰般舟三昧院御経供養之図／⑤① 同御中陰泉涌寺御法会之図

⑤② 孝明天皇御諡号山陵使行列之図／⑤③ 同御諡号山陵使宣命奉読之図

⑤④ 仁孝天皇諡闋終大祓之図／⑤⑤ 同聖忌御懺法講御行道之図

このようにC『旧儀式図画帖』の大半は、①(幕末の恒例年中行事)を除けば、②光格天皇と③仁孝天皇・孝明天皇の関係儀式(「御凶事」を含む)および④光格天皇中宮と⑤仁孝天皇女御の「御凶事」(葬送儀式を詳しく描いている)。

すでに明治二十年(一八八七)、公的なA『公事録』が編纂されていたにも拘らず、約十年後にC『旧儀式図画帖』が作成されたのは、今後とも避けて通れない天皇と皇后の大葬儀式(大喪)に関する「旧儀式」への理解を深めるためでもあったのであろうかと思われる。

なお、先にできたA『公事録』には、「公事付録之図」として、第百二「御即位殿庭鋪設之図」、第百三「御即位御礼服之図」、第百四・五・六「御即位御調度之図」(二・二・三)が描かれている。これも近世の即位関係資料として精しい検討を要するが、高齢(八十一歳)の私ではそれに取り組むことが難しい⁹⁾。この部分だけでなく、『公事録』の全体像が若い有志の手で本格的に研究されることを念じている。

註

- (1) 嗣永芳照氏編『図説 宮中行事』(大型横長本、昭和五十五年、同盟通信社)
- (2) 宮内庁(図書寮文庫)所蔵『公事録』は、書陵部の画像公開システムに恒例と臨時の絵図五八面が最近カラーで公開された。そのうち十三点は、宮内庁三の丸尚蔵館展覧会図録『古記録に見る王朝儀礼』(平成元年)にカラーで掲載されている。
- (3) 『嘉永年中行事』は、著者の勢多章甫がみずから作成した同書の『考証』(各行事の記録と変化の解説)と共に、『故実叢書』(新訂増補版28、昭和二十六年、明治図書出版・吉川弘文館)所収。
- (4) 『旧儀式図画帖』は、東京国立博物館所蔵本の一部「年中恒例御儀式(新嘗祭・大嘗祭・豊明節会)」が同館研究情報アーカイブスにカラー写真で公開されており、また同館の猪熊兼樹氏著『旧儀式図画帖にみる宮廷の年中行事』(平成三十年、同館)が出ている。
- (5) 『(当時)禁裏年中行事』は、和田英松氏『皇室御撰之研究』(昭和八年、明治書院)の解説とおり、後水尾上皇が後光明天皇在位中の「正保・慶安(一六四四～一六五二)頃の御饌」とみられる。ただ、承応二年(一六五三)の内裏炎上の際に焼失

したので、「御草本」を基にして「当今」(靈元天皇)の寛文三年(一六六三)ころ書き改められたものと考えられる。改定史料集覧26・列聖全集(御撰集6)など所収。

(6) 拙著『五箇条の御誓文』関係資料集成(平成三十年、原書房、明治百年史叢書、四七三巻)。

(7) 三上景文著・正宗敦夫氏編『地下家伝』昭和十三年、日本古典全集刊行会、再版昭和四十三年、自治日報社。

(8) 藤島助順に関する資料は少い。ただ、ネット情報ながら、平成三十年一月に古書ネットオークションで落札すみ和本十一冊の掲載写真表紙に「藤島(花押)」「助順」の署名がある。

そのすべてが仁孝天皇朝の記録とみられ、「天皇御元服／天皇御事始／御笙始之儀」「御即位上方御即位由奉幣日時定／礼服御覧……」「御即位 当日」「大嘗会一／国郡卜定検校行事定……」「大嘗会二／検校使／荒見川祓／御祓／斎火御祓／由奉幣発遣陣儀」「大嘗会三／小斎 卜定／院中清暑堂御神楽御遊拍子会」「大嘗会四／……」「大嘗会五／豊明節会……」「嘉永七年甲寅四月六日内裏炎上……」と読みとることができる。

また、米田雄介氏(正倉院事務所長)が「江戸時代末の宮中行事図」(「京——御所文化への招待」淡交社ムック、平成六年刊所収)に簡単な解説を添えて全画面をカラー写真で紹介されたのは、京都の松前屋に所蔵される、十八枚の宮中行事図を貼り並べた屏風である。その末尾図に「正六位藤島対松藤原助順」と署名されており、左のごとく十二図はC『旧儀式図画帖』と酷似し、それ以外の六図もCと同じ頃(明治三十年代)に描かれたものとみられる(Cの番号()↓()で示す)。

Cと同様の画面：(2) 摂家已下参賀／(7) 千秋万歳／(18) 御鏡洗／(20) 闘鶏／(22) 葵祭 舞御覧／(23) 葺菖蒲／(32) 八朔／(36) 菊綿／(38) 御

玄猪／(39) 新御茶之壺切／(50) 御煤払／(53) 御髪上

Cに不在の画面：六月 御茶壺／七月七日 近衛家ヨリ花扇献上／七月(十三日) 御燈籠花飾献上／八月又ハ九月 黒羽踊

御覧／十一月 御霊神御火焚祭／十二月 清祓

なお、「京——御所文化への招待」所載の拙稿「宮廷の神事と仏事」では、平安以来の「年中行事御障子文」と共に、「建武年中行事」当時(禁裏)年中行事「嘉永年中行事」の対比表を掲げた。

(9) 拙著『光格天皇関係図集成』(令和二年、国書刊行会)では、C『旧儀式図画帖』から光格天皇御譲位関係図を抄出したが、A『公事録』の⑤(御譲位・御受祥)との比較検討に及んでいない。なお、国立国会図書館所蔵(広池千九郎氏旧蔵)『寛政再興年中行事』(九条道孝公御蔵本之模本の転写本)も検討する必要がある。

(京都産業大学名誉教授)